『もりおかの短歌』春の部

一般部門　優秀賞十首

有明(ありあけ)の月(つき)の光(ひかり)に
夢(ゆめ)さめて
ふらり出かける神子田(みこだ)の市(いち)に

盛岡市　赤坂　昌信

高松(たかまつ)で花愛(はなめ)ず君(きみ)に
より添いて車椅子押(くるまいすお)す
うららの小路(こみち)

青森県弘前市　木村　千尋

不来方(こずかた)の城跡(しろあと)に立(た)ちて
花(はな)に酔(よ)ふ
ひとときなれど古都(こと)の風吹(かぜふ)く

宮城県仙台市　木村　智佑

檀ヶ森の丘に
広ごるりんご園
花ほころびて小鳥さえずる

盛岡市　小林　貴史

幼き日
祖父と歩きし北上の
川辺を今日は我が子と歩く

宮城県登米市　佐藤　礼佳

柔らかき言葉に飢えて
盛岡の友の声聞く
久方振りに

青森県青森市　鈴木　操

盛岡の古い町家を
訪ねれば
格子戸の奥にお雛さま見ゆ

盛岡市　西川　政勝

ふるさとの山と友に迎えられ
孫を引く手に
花吹ぶき散る

東京都東村山市　廣瀬　典子

陸と海むすびし長き塩の道
南部牛追い
唄に残れり

盛岡市　堀米　公子

遠景の残雪の山川に映え
橋のたもとで
暫し佇む

茨城県日立市　飛田　秀幸

ジュニア部門　優秀賞三首

該当なし

【講評】

啄木の里、盛岡で短歌を投稿してくださることに感激します。季節が冬から春に移るとき、人は何を思うでしょうか。今回も多くの力作が集まり、選歌に悩みました。盛岡の魅力にあらためて気付かされました。

令和元年　六月選
投稿数　百九首
選者　赤澤　篤司　氏

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉　優秀賞十首

ふるさとの
山を眺めて詩を詠む
哀しき時も嬉しき時も

盛岡市　赤坂　昌信

知事さんの
春のマスクは菌寄せず
南部型染め伝統の柄

盛岡市　堀米　公子

波の瀬に
大森浜の啄木は
憂いをさそう、里を恋いてか

北海道北斗市　有賀　久雄

人々（ひとびと）の
思（おも）いを浴（あ）びて　うるまへと
雪（ゆき）から今（いま）は　盛岡（もりおか）も春（はる）

沖縄県うるま市　前徳　薫

穏（おだ）やかな春（はる）の盛岡（もりおか）
不屈（ふくつ）なる英気（えいき）を貰（もら）う
石割（いしわ）り桜（ざくら）

盛岡市　河野　康夫

復興（ふっこう）の
三鉄（さんてつ）突風（とっぷう）の中走（なかはし）る
大漁旗（たいりょうばた）で向（むか）える人々（ひとびと）

盛岡市　関　容子

感染者（かんせんしゃ）ゼロの古里（ふるさと）誇りつつ
思郷（しきょう）の念湧（ねんわ）く
よ市（いち）の記事（きじ）に

青森県青森市　鈴木　操

ふきのとう
朝日(あさひ)に照(て)らされ春告(はるつ)げる
旬(しゅん)を探(さが)しに神子田朝市(みこだあさいち)

埼玉県さいたま市　片山　奈桜子

いつまでも
消(き)えるはずのない恋心(こいごころ)
岩手山(いわてさん)でも分(わ)かるはず

髙橋　凛

君(きみ)の活(い)きし
街(まち)の姿(すがた)は見(み)えねども
中津(なかつ)の水音(みなみいき)に呼吸(いき)を共(とも)にす

兵庫県丹波市　大野　節子

春の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

今の季節、もろ手を挙げて春を謳歌している…はずだった。感染者が無い盛岡でも感染拡大防止のために県外との往来も遠慮がちになり、今年はひっそりと「ふきのとう」のような思いで過ごしている。そのような中、詠み人たちは故郷の自然や魅力を部屋の窓から見つめ、あるいは思いを馳せながら、噛みしめているのだろう。盛岡人らしさとともに、今の時代を生き抜いてゆく逞しさに愛しさを感じながら、私はこの十首を選んだ。

令和二年六月選　春の部

投稿数　七十五首

選者　山本　玲子

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉　優秀賞十首

幼き日祭り太鼓の音に泣きし
母の背中の
温み恋しき

奥州市　沼倉　規子

残雪の川に遊びし我が影は
とけてはむすぶ
うたかたの夢

北海道函館市　古屋　創大

故郷を離れこの地に学ぶ子を
抱き守れよ
もりおかの空

愛知県一宮市　五十嵐　理子

鷲形の見ゆる御山に励まされ
「希望」歌ひて
夢の種選る

青森県青森市　鈴木　操

石割って桜の花が咲く如く
覚悟を決めて
この地に生きる

盛岡市　河野　康夫

何時も行く本屋のレジに
見たことのなき顔が立つ
春の夕月夜

盛岡市　立石　昂

札幌の学生時代思い出す
盛岡に咲く
リラの香りに

盛岡市　鈴木　充

天峰山（てんぽうさん）から
春の裾野（すその）を見下（みお）ろして
若者達（わかものたち）のパラグライダー飛（と）ぶ

盛岡市　小林　貴史

「ウイルスを運（はこ）ばぬように」
俯（うつむ）きて着任（ちゃくにん）の春（はる）に
清（きよ）き山（やま）あり

盛岡市　郷家　美磨

機（はた）を織（お）る
弥生三月（やよいさんがつ）もりおかの
紫紺裂織（しこんさきおり）わが家（や）の自慢（じまん）

盛岡市　赤坂　昌信

春の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

『もりおかの短歌』に関わるようになってかれこれ十年。この間に東日本大震災があり、盛岡を訪れる修学旅行生や観光旅行者が激減しました。震災の復興が徐々に進むなか今度は新型コロナウイルスの世界的な流行です。ウイルス禍の日々、行動は制限され籠りがちの暮らしと思われますが、意外にも前向きな人々の生活が詠われていて、鑑賞しながら心強くなりました。

令三年六月選　春の部
投稿数　六十一首
選者　松田　久恵

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

中津川浄き流れに草萌える
（なかつがわきよ　なが　くさも）
風爽やかに
（かぜさわ）
清しき心
（すが　こころ）

盛岡市　餘目　忠吉

雲が湧き八幡平に
（くも　わ　はちまんたい）
龍が来る
（りゅう　く）
ドラゴンアイのブルー謎めく
（なぞ）

盛岡市　赤坂　昌信

啄木に一目会ひたく渋民へ
（たくぼく　ひとめ　あ　しぶたみ）
三十一文字に
（みそひともじ）
思ひをのせて
（おも）

奥州市　小野寺　洋一

図書室（としょしつ）の
窓に親（した）しき岩手山（いわてさん）
一礼（いちれい）をして旅立（たびだ）つ朝（あした）

秋田県大仙市　鈴木　仁

開業（かいぎょう）より半世紀余（はんせいきよ）の業績（ぎょうせき）を
惜（お）しみて閉（と）づる
岩山（いわやま）パーク

青森県青森市　鈴木　操

わが心預（こころあづ）けし君（きみ）の来（く）るを待（ま）つ
菜種梅雨降（なたねづゆふ）る
開運橋（かいうんばし）にて

青森県青森市　鈴木　操

もりおかの城跡（しろあと）
やっと春（はる）めいて
山茱萸（さんしゅゆ）の黄（き）の石垣（いしがき）に映（は）ゆ

盛岡市　鈴木　充

雪形（ゆきがた）の鷲（わし）がくっきり浮（う）き上（あ）がり
今日（きょう）は畑（はたけ）に
石灰（せっかい）を撒（ま）く

盛岡市　中島　久光

高松（たかまつ）の池（いけ）の岸辺（きしべ）の花筏（はないかだ）
餌（えさ）を求（もと）める
鳥（とり）が蹴散（けち）らす

盛岡市　中島　久光

石割（いしわ）りの桜（さくら）咲（さ）く頃（ころ）夢（ゆめ）うつつ
鬼（おに）の手形（てがた）の
岩（いわ）もやわらか

盛岡市　堀米　公子

春の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

「もりおかの短歌」が始まったのは平成二十年の夏の部からで、今年で十五年目になる。これだけ長い間に多くの歌が詠まれてきたが、同じものはひとつもない。岩手山や啄木など素材は同じであっても、それぞれに込められた思いに違いがあるからである。これからも、素材は同じであったとしても、それをどう自分に引き付けて詠むかに心掛けて作って欲しい。又、推敲することを大切にしてもらいたい。

令和四年六月選　春の部

投稿数　八十八首

選者　山本　豊

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

草萌(くさも)えて
春の匂(はるにお)える中津川(なかつがわ)
軽(かる)ろき水音(みおと)にしばし佇(たたず)む

盛岡市　餘目　忠吉

不来方(こずかた)の城址(じょうし)に立(た)ちて
願(ねが)いしは比翼連理(ひよくれんり)の
旅(たび)の続(つづ)くを

愛知県犬山市　林　進

盛岡(もりおか)の菜園(さいえんどお)通り
街路樹(がいろじゅ)の小豆梨(あずきなし)散り
舗道(ほどう)を埋(うづ)む

盛岡市　鈴木　充

春の日に川面きらめく
鮭のぼる中津川辺に
稚魚放つ児ら

花巻市　安部　勝衛

山神の広き両手に守られて
不来方の野に
春の風ふく

東京都品川区　増田　裕美

初夏の光のなかに
啄木の歌碑ふるさとの
山を背に立つ

奥州市　遠藤　カオル

栃の花歩道につもる裁判所
石割桜に
若葉かがやく

千葉県浦安市　岩田　一

鉈屋町（なたやちょう）
老舗町屋に情緒有り（しにせまちや　じょうちょあり）
歴史が語る商いの道（れきしがたるあきなみち）

盛岡市　三澤　信裕

ふるさとの
鬼の手形を取り囲み（おにのてがたをとりかこみ）
眺める子らは瞳をこらす（ながめるこらはひとみをこらす）

盛岡市　赤坂　昌信

雪囲ひ解くと（ゆきがこひとく）
希望の芽を抱きし（きぼうのめをだきし）
石割桜の枝々弾む（いしわりざくらのえだえだはづむ）

青森市　鈴木　操

春の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

かりかりのせんべいをたべ
職人（しょくにん）の技（わざ）と伝統（でんとう）
また思（おも）い出（だ）す

京都市伏見区　松岡　雪華（十四歳）

【講評】

一般部門・ジュニア部門

選歌をしていると盛岡の街は歌の素材が多いと感じた。ニューヨークタイムズで世界の行くべきところの第二位に選ばれた。それが影響しただろうか。多くの外国人観光客が目についた。ボランティアのガイドさんたちは忙しい日々を過ごしているだろう。短歌は三十一音の抒情詩である。短時間で作ることができる利点もあるが、思いをどう伝えるか。美しい言葉で作っただけでは詩にならない。何を見るかが大切である。真実が見えれば、優れた作品となる。何度でも挑戦してほしい。

令和五年六月選　春の部

投稿数　百十二首

選者　赤澤　篤司

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉　優秀賞十首

もりおかの
ござ九の裏(うら)の柳(やなぎ)の木(き)
彼岸(ひがん)を過(す)ぎてほんのり緑(みどり)

盛岡市　鈴木　充

祖父(そふ)の顔岩手山(かおいわてさん)かよ
堂々(どうどう)と教(おし)えてくれた
生(い)きてる力(ちから)

新潟県北蒲原郡　加藤　愛理

土手(どて)の草浅葱採(くさあさつきと)りてくれる人(ひと)
盛岡(もりおか)の春(はる)
持(も)ちて来(き)たり

盛岡市　堀米　公子

今の世(いまよ)を
もう解(わか)らぬと嘆(なげ)きつつ
読(よ)み返(かえ)したり「一握(いちあく)の砂(すな)」

盛岡市　赤坂　昌信

古都(こと)の風(かぜ)そよぐ城趾(じょうし)に
啄木(たくぼく)を偲(しの)びて
歌碑(かひ)を心(こころ)に刻(きざ)む

盛岡市　河野　康夫

満開(まんかい)の春(はる)の空(そら)から
不来方(こずかた)の城跡(しろあと)に降(ふ)る
桃色(ももいろ)の雨(あめ)

盛岡市　菅原　茉理奈

蕨(わらび)出(で)る季節(きせつ)が来(く)れば
胸(むね)よぎる
外山節(そとやまぶし)の歌(うた)のセリフが

盛岡市　西川　政勝

烏帽子岩（えぼしいわ）

母（はは）と見（み）し日（ひ）ははろかなり
また咲（さ）く桜（さくら）ひとり来（き）たれど

花巻市　千田　正平

君（きみ）のすむこの街（まち）が好（す）き
盛岡（もりおか）は恋（こい）が生（うま）れる
青春（せいしゅん）の街（まち）

花巻市　安部　勝衛

冠雪（かんせつ）の岩手山（いわてさん）みて盛岡（もりおか）に
来（き）たぜとつぶやく
旅（たび）のはじまり

東京都大田区　井田　正美

『もりおかの短歌』春の部

〈ジュニア部門〉　優秀賞

（応募時、中学生以下に限る）

該当なし

【講評】

長かったコロナから解放され、日常を取り戻した私たちは、新鮮な気持ちで春を迎えた。そしてさわやかな風を受け、日光を胸いっぱいに吸い、外に飛び出しました。この日を待ちわびていたかのようにアサツキ、ワラビが出、それらを採って食べられるほど元気が復活し、桜の花も喜びの目で眺め、雨も、雪も美しく優しく感ぜられる。そんな素敵な作品ばかりだった。今回、歌選びをさせて頂いているうちに、無意識のうちにそうした盛岡の日常の中のときめきを私は探していたのだろう。おそらく啄木だったらそうしたにちがいない。

令和六年六月選　春の部

投稿数　七十九　首

選者　山本　玲子